近藤昌夫先生のご退職に寄せて

今　井　裕　之

近藤昌夫先生が関西大学文学部に助教授として赴任されたのは1993年のことでした。その後、外国語教育研究機構、外国語学部を経て、今年度末までの33年間の長きに渡り、関西大学のロシア語教育を牽引されました。ご退職されるに際し、深い寂寥の念を禁じ得ません。これまでのご功績に心からの敬意と感謝を表したいと思います。

近藤先生の研究面のご功績をしっかりと理解し、適切に語る言葉を持っておらず、大変申し訳なく失礼ではありますが、私の専門分野である外国語教育研究の視点から、近藤先生が取り組んでこられた共通教養外国語科目や外国語学部でのロシア語教育の実践を通して私が学んだことを少し書かせていただきます。

関西大学のロシア語教育では、長年にわたり、ピロシキをつくりながらロシア語を使うワークショップ、学内朗読コンクール、関西ロシア語コンクールなどの体験的な学習活動、関西大学の共通ロシア語教科書編纂、科目担任者間の連携指導など、言語と文化を広く、深く理解することができる独自のカリキュラムを編成し実践しています。近藤先生と小田桐先生が中心になってロシア語の先生と学生たちと一緒にピロシキを作る様子を拝見したことがありますが、学生たちが楽しそうにかつ真剣に取り組む姿が強く印象的に残っています。

私のゼミの学生に、関西ロシア語コンクールのスピーチコンテストで入賞した学生（村北航大さん）がいました。彼にロシア語を学ぶ動機を尋ねると「船が好きで造船業に携わりたくてロシア語を学ぼうと思った」とのことでした。ハバロフスクに単身ロシア語研修に行くなど行動力豊かで、彼の名の如く「大海に漕ぎだす船」のような人だと思っていましたが、関大外国語学部のロシア語教育カリキュラムに出会ったことが、夢を後押ししたのかと思うと、彼がいかに幸運で幸福だったかと今更ながら思います。

学生たちの教育の記憶ばかりで恐縮ですが、近藤先生のゼミのある学生が、卒業プロダクトが進まず卒業延期になった際にも、卒業演習2を翌春学期に開講しながらご指導を続けてくださいました。文化比較の題材が定まらない学生の関心を、時間がかかっても自分の意思で語れるように引き出そうと、学生に寄り添いながらご指導される様子を伺い、共感や対話を大切にする教育の意義を教わったように思っています。

言語の「コミュニケーション・ツール」としての側面だけを切り出して、教育目標とするような外国語教育とは異なり、近藤先生が描かれたロシア語教育は、ロシア語に生きる人と社会のリアリティを理解し、関わろうとする「関わろうとする生き方を育む」教育なのではないか

と思うと、自らの教育実践を通して先生が示してくださった外国語学部の成すべき教育の姿形を、私たちは今後も継承、発展させていかねばと心新たにさせられます。

近藤先生、外国語学部、関大ロシア語教育をこれからも見守ってください。